

障害者と雇用

2017/2 No.473

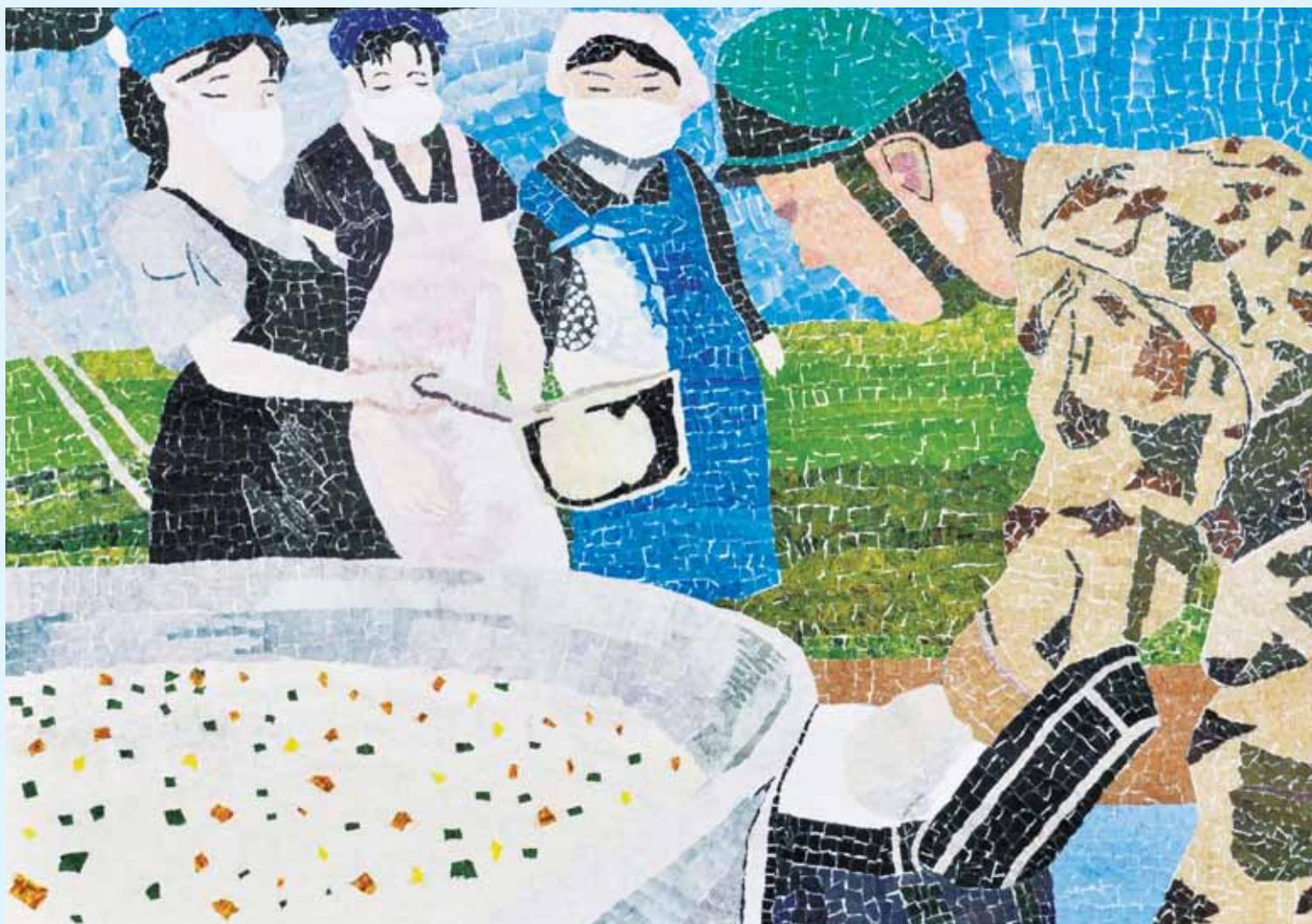
# 働く広場

**編集委員が行く** 障害者の働く場は、地域づくりから  
～さまざまな立場の住民が、愛南町の“生業”を守る、創る～  
公益財団法人正光会 御荘診療所、NPO 法人 ハート in ハートなんぐん市場（愛媛県）

**職場ルポ** 障害者の3分の2は正社員 ～障害者は大切な働き手～  
ショッピングバッグ製造・ハイコーパック株式会社（栃木県）

**グラビア** 親子でカフェをオープン！ ～車いすの店長が笑顔でお出迎え～  
就労継続支援 A 型事業所 キラキラ・スマイル cafe（熊本県）

**私のひとこと** 「生きる」大地の減少に想う 社会福祉法人 森と木 岸田 隆さん



「がまだせ熊本」熊本県・宮村 <sup>ひかる</sup>光さん



独立行政法人  
高齡・障害・求職者雇用支援機構

誰もが職業をとおりて社会参加できる「共生社会」を目指しています

2 月号

## 障害者の働く場は、地域づくりから ～さまざまな立場の住民が、愛南町の“生業”を守る、創る～

公益財団法人正光会 御荘診療所、NPO法人 ハート in ハートなんぐん市場（愛媛県）

一般社団法人 JUNE 武田 牧子



### 編集委員から

中山間地域で人口減少に歯止めのかからない地域は、全国各地に存在する。そうした地域で、地域の特性や資源を活かしながら、さまざまな工夫と制度を活用して、「障害者と住民が共に暮らす・働く」場を、“海を活かし、土を活かし、人を活かす”を合言葉に、精神科医療・保健福祉の視点から、町づくりに取り組んでいる地域取材した。

### 取材先データ

公益財団法人正光会 御荘診療所

〒798-4102 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平山 846 番地  
TEL 0895-74-0111

NPO法人 ハート in ハートなんぐん市場

〒798-4102 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平山 943 番地

(写真) 小山博孝

Keyword : 精神障害、農・林・漁業、高齢者、職務創出

# POINT

- ① 愛南町の一次産業をベースとした「生業」を守り・創り続ける
- ② 多様な人が、多様な価値観を認め合い、多様な生き方を選択できる地域へ
- ③ あらゆる人が、なくてはならない「小さな担い手」。「共に生きる」から次のステージへ



入院病棟をなくし、御荘病院から「御荘診療所」に改革を進める所長の長野敏宏先生

## 精神科病院を閉鎖して診療所へ

今回の訪問先は、宇和海に面した風光明媚な愛媛県南宇和郡愛南町。愛媛県松山市から車で約2時間の、海に面し山々に囲まれた農山村地域である。人口は約2万人。毎年500人前後の人口が減少し、高齢化率は約35%強である。保健所は統廃合され、現在は医療圏域と生活圏域がほぼ一致しており、全国の中山間地域と同じような状況にある。

2016（平成28）年6月、この町の精神科病院「御荘病院」が閉鎖され、「御荘診療所」が誕生した。

1962（昭和37）年に開業した「御荘病院」は、愛南町の唯一の精神科病院で、宇和地域の精神保健医療を担っていた。ピーク時には159床あった病院は、53年の歴史を閉じた。閉鎖時点ですうし

でも退院することができなかつた患者さんは、新しくできたグループホームの個室に住まい、「給食」ではなく「わが家の食事」を日々いただくながら、地域で暮らすことを目指している。地域で暮らす患者さんたちは、訪問看護ステーションと、新しくできた「御荘診療所」が支えている。

病院を閉鎖できた背景には、さまざまな地域活動に参画し、そこから精神医療をはじめとする専門家が、地域振興を地域住民とともに模索し、地域にあるさまざまな分野の人や事業とのつながりを広げていったからにはほかならない。

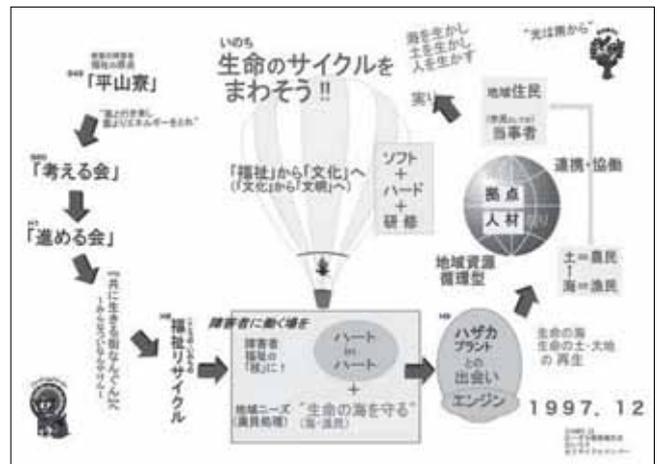
## さまざまな立場の住民が、町の生業を守る、創る

前述したように、人口減少とともに、地域の高齢化は足音もなく進み、農業はもとより、漁業、商業と衰退が進んでいった。いくつかの小さな事業が、次々と廃業の憂き目にあることを目の当たりにするようになった。

2005年に設立された「NPO法人ハートinハートなんぐん市場」は、「仕事を作り出すだけでなく、町のなかで住民がやっていた担い手のない小さな仕事、残したい仕事を受け継ぐ」をモットーに、地域の事業と一緒に、そこで働いていた人たちをスタッフとして雇用。まさに共働きの仕組みをつくりだしたのだ。図1がその基盤となった地域活動と理念である。

最初に手掛けたのは、廃業しようとし

図1



ていた観葉植物のレンタルである。この事業は決して大きくはないが、現在も確実な売上げのベースとなり、毎日数人が担当して、年間300万円の売り上げになっている。

次に、赤字続きの町営「山出憩いの里温泉」の経営を指定管理者により手掛けた。その温泉で働いていた人たちの再雇用と障害者雇用がコラボし、一緒に働くこととなったのである。

「障害者の働く場づくり」で脚光を浴びた「山出憩いの里温泉」は、当初は観光客をターゲットに全国に営業をかけ、「御荘診療所」所長であり、「NPO法人ハートinハートなんぐん市場」の理事である長野敏宏先生自らが営業マンとなって集客をしていた。それなりに客は集まり、売上げも町営時代より大幅に伸びた。し



診療所近くには、グループホームが建設された

かし、次第に従業員にも応援してくれる仲間にも無理を強いる部分が出始め、徐々に疑問を感じるようになったという。

もともと宿泊施設の定員にはかぎりがあ、り、キャンプは夏場しか集客できない。年間を通じて売上げを伸ばす方法は何か。

「地域のなかで循環する仕組み」という、当初の理念に立ち返り、それは「地元の人」の台所になることではないか」と気がつき、大きく方針を変えた。単価を引き下げ、家庭料理を中心としたバイキング形式を取り入れ、一度には食べきれない豊富なメニューを揃えることで地域住民のリピーターを狙う。土日祝日のレストランに力を注いだところ、狙いどおり「山出憩いの里温泉」の利用者の半数が地元住民となった。リピーターが増え、観光客をターゲットにしていたところより売上げが伸び続け、レストランの売上げ比率は46%となっていた。レストランの食材も、地元の農家が生産した野菜、地元の漁業者が採ってきた魚介類や、「なんぐん市場」で生産したものを大半とした。地元住民が頻繁に利用することが、「地元とのコンフリクト(※1)が自然になくなる」という大きな副産物も生み出していた。

## アマゴ(サツキマス)の養殖

「山出憩いの里温泉」のある山出地区の水道は、良質な湧き水を使用している。その水源近くで、40数年前から地元の方

がアマゴの養殖をしていた。アマゴの炉端焼きは、「山出憩いの里温泉」の特産品として、宿泊客に人気の一品であった。養殖をしていた職人さんが高齢で引退すると聞き、アマゴ養殖の施設を借り受け、その職人さんが指導者となり、「なんぐん市場」が事業を引き継いだ。

水源近くの山中で、成魚から採卵し、14基のいけすで5万匹の稚魚を育て、アマゴとして出荷する。さらに昨年から愛媛大学と漁業者、愛南町漁業協働組合、愛南町が産官学で連携して、冬に出荷を終えたタイやハマチの空いている養殖場を活用。アマゴを海で養殖しサツキマスとして大きく育て、新たな特産品を目ざしている。そこでは6人の従業員が、養殖の専門家と一緒に働いていた。いけすの魚に餌をやったり、いけすの水を抜きながら網で魚を捕獲して、メスから採卵した卵にオスの精子をかけて受精させ、孵化をさせるための樹に並べていく作業などを行っていた。作業療法士の田上純一さんが一人ひとりの作業特性を考慮して作業分担を指示し、従業員はきびきびと仕事に取り組んでいた。採卵に興味を持ち始めた男性が「やってみよう!」と声をかけられた。彼は採卵は初めてのチャレンジらしく、緊張しながらもメスの腹を割き、真剣に採卵に取り組んでいた。受精した卵を孵化器に移し終えると額の汗を拭き、ホッとしていたが、その顔は誇らしげだった。山出温泉の中心メンバーだった彼は、当初は職

場になじまず退職を考えていたが、頑張りやが評価され、養殖部門に配置替えとなっている。田上さんは、「さまざまな働き口があるので、一人ひとりの状態に応じた仕事を分担できるし、従業員もどれが自分の得意な分野になるかを探ることがができるようになってきた」という。事業が愛南町のあちこちに点在するのは、管理するのはたいへんだが、従業員にとっては大きなメリットがあると話してくださった。

## 農業への取組みの拡大 多品種小ロットで生産

農業従事者の高齢化による耕作放棄地は、全国の大きな課題であるが、愛南町も例外ではない。

長野先生や福祉事業を担うスタッフが、地域活動をしているなかで、せっかく育ててきた田んぼや畑を、体が動かなくなつて放棄せざるを得ない悩みをじっくり聞き、その解決方法を一緒に探る。その人が希望すれば、「なんぐん市場」は地元ならではの食材を残すこともできる。耕作放棄地を少しでもなくすために農家から土地を借り受け、海老芋やサツマイモ、果物のポポ、葉物類など何十種類もの野菜を「多品種小ロット(※2)」で生産している。

農地を借り受けた後、野菜の生産の指導は、この土地の地主さんが先生となつて行っている。「教える立場でもあり、見守られる立場でもある」まさに、おたがいがワインワインの関係で、地域一体となった

※1:衝突、葛藤、対立などの概念

※2:少ない生産単位で、多くの品種をつくること



受精卵を丁寧に扱って、孵化を待つ



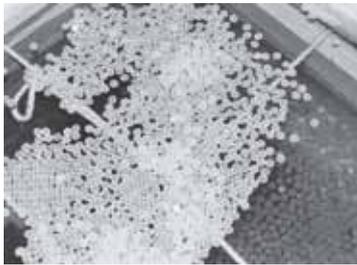
採卵し、精子をかけ受精作業を進める



サツキマスの養殖・孵化場。魚にエサをまく利用者のみなさん



採卵のための魚を準備する



取組みである。障害のある人もない人も、ともに農業従事者としてそこで働いているのである。

「なんぐん市場」が行っていたのは最初は畑作だけだったが、田んぼの管理の依頼を受けるようになり、米栽培も手掛けるようになった。稲作を手掛けだして、初めて「農家の仲間入りができた」と感じたとそうである。

その米は、3年目にして、この地域の土地と水に合った「にこまる」という品種が見つかり、美味しい良質なものができた。ここでも地域の循環が生まれている。その良質な米づくりを支えているのは、生産者だけではなかった。

「『なんぐん市場』で働きたいけれど、厳しい仕事でむずかしい」という人も出てきた。そこで、「『なんぐん市場』と連携して働ける、緩やかな場が必要」と「多機能型事業所 南生<sup>なまき</sup>」をつくり、利用者の方が数十人でお米の選別作業もすることにした。それぞれの持つ力に応じた働き方と作業が準備され、また他法人の福祉事業所のグループホーム利用者も、その人に合った事業所を活用されていた。

農産物は、「山出憩いの里温泉」の食材としてだけではない。農業に取り組んだ当初は、「安売り合戦に巻き込まれたくない」と敬遠していたそうであるが、地域の方々と交流を図り、地域の方に購入してもらうには「産直市は大きな役割を果たす」と気がつき、近年は積極的に出荷している。

産直市は、販売コストが抑えられ、ロス管理もしやすく、消費者の声や意見をタイムリーに聞くことができるので、次の生産計画や品質管理に活かし、やりがいにつながるなど、たくさんメリットがあった。

後述するアボカドの圃場を増やすために、山の開墾<sup>かいこん</sup>を行うが、そのときのたくさんの広葉樹が櫛木<sup>はだま</sup>（※3）として活用され、シイタケやナメコ、キクラゲなどの原木栽培面積もどんどん広がった。いまでは、生シイタケを販売するほか、干しシイタケなどの加工販売もしている。

シイタケの圃場を取材させていたのだが、その量たるや圧巻である。取材当日は雨だったので、単にシイタケを取るだけでなく、雨を避けるためにかけておいたビニールを取ったり、大きな櫛木を動かしたり、結構重労働である。この日は、4人の屈強な男性従業員がスタッフと一緒に作業にたずさわわり、私もシイタケの収穫をさせていただいた。

そのほかには、あちこちの山で我が物顔にはびこる竹林を整備するために笹<sup>たけのこ</sup>を収穫し、ラーメン用の国産メンマへの加工も手掛けている。また、ポンカンや河内晩柑<sup>かわちばんかん</sup>（愛南ゴールド）など、良質のミカン畑の所有者が高齢になると、その維持管理も引継いでいる。

いまでは、借り受けている農地は3ヘクタール。山林は50ヘクタール。自社の山林12ヘクタールを合計すると、65ヘクタールにもおよぶ。

※3：シイタケを栽培するとき、種菌をつける原木



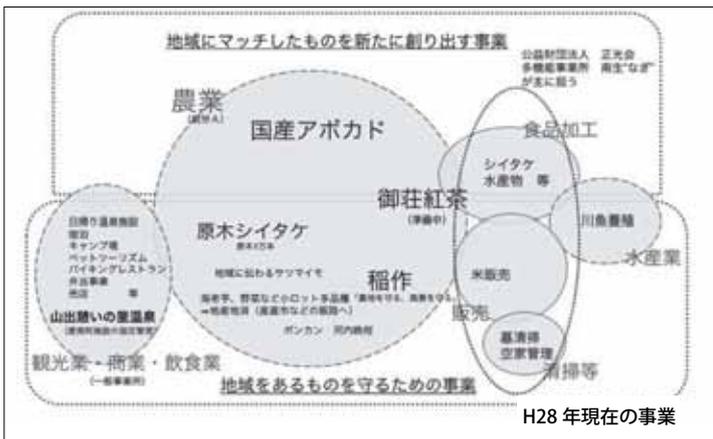
アボカドの生産協力のみなさんとの研修会

アボカド畑での手入れ作業

# アボカドの生産に チャレンジ

多品種小ロットを推進する一方で、2009年ごろから「これからは地域の土壌、気候、ひと」に合っていて、物流のハンディを克服でき、できるだけ長期に、安定した需要が見込めるもの。ビジネスモデルとして成り立つことは最低条件」「環境を守り、さらに、環境を改善する。ありとあらゆる方の「生業」の場にした」と、「行き詰まった地域の農業再生に大きく貢献し、多様な住民が希望を持ち、わくわくしながら取り組みたい」「農業、観光・飲食業、加工業、政・官・財、医療福祉関係そして、もっとクリエイティブな仕事を望むもの。それを核にしながらが拡がるものは何か」と仲間と議論を重ね、夢のある取組みとして目を向けたのが「アボカド」である。その選定理由は「たしか、近所のおばちゃん家で生っていた。日本で、世界で、消費が伸び続けている。国産のものを市場がほしがっている。世界につながるツールになりそう。地域のあらゆる業界で活用できそう。大幅な利益が出れば、基金にしたり、再投資したりできるかも。みんなが初めて挑戦することで、教える側・教えられる側の関係が創り出されていない。そのため、(愛南町のみならず)地域の産業ごと創造すれば、そこは多様な人の生きる場へとつながるのでは」と考えたのである。こうした議論が、愛南町で指定管理者制度のセミナー講師の耳にとまり、この壮大な計画の実現化につながったのだ。

図2



H28年現在の事業

図2の中心に、大きく国産アボカドがある。それほど、期待していることの表れである。種を輸入し実験したり、苗を輸入したり、失敗が続く大変なこともたくさんあったというが、6年がかりで実現の目途がついたそうである。数年前にうかがったときは、まだ一部の山に小さな木が植わっていただけだったが、今回は、あちこちの圃場にアボカドの木が大きく育ち、たわわに実をつけている木がたくさんあったので、そのためめ努力に正直驚いた。

この事業は、「東果大阪株式会社」の指

南を受けた果物や野菜の世界的ブランド「Dole」との共同事業で行っている。まさに世界を相手に新たな事業を創造しようとしていた。この事業は単に夢を見るだけではなく、愛南町以外のアボカドが育つ地域と連携している。万が一、天候不順で愛南町のアボカドが不作であっても、ほかの土地で納品できるように、わが国の事業者が栽培ノウハウを伝え、ネットワーカーに栽培ノウハウを伝え、ネットワーカーに受注に応じられる仕組みをつくるために、静岡県の事業者とも連携を取っているそうである。今後どれだけたくさんの方々への雇用を創出していくのだろうか。

この日、そのアボカドの圃場の斜面では、3人の方が、苗を防寒・防風のための資材で囲む作業を行っていた。その指導は、建設業が廃業となり、職を失ってしまった釣井直さん(59歳)が行う。ミカン畑や雑木林を開墾していくには重機での作業と人出が必要であるためだ。釣井さんと従業員が力を合わせて開墾し、そこにアボカドの木を植え、世話をし、育てていく。ここでも協働が実を結んでいた。

毎週月曜日の夜は、地元住民である、吉田良香さん(60歳)、「NPO法人ハートinハートなんぐん市場」理事長。地元で会社経営、前出の釣井直さん、木村栄治さん(61歳)、元ガソリンスタンド勤務)、大黒直行さん(67歳)、元「山出い行憩いの里温泉」管理者)、稲田豊さん(73歳、稲田海産代表)の5人と、「御荘診療所」の長野敏宏先生、中野良治さん(40歳、精神



シイタケ栽培、収穫作業をするみなさん



アボカドの生産研究にも力を入れている



従業員と利用者のうち41人が精神、14人が知的、1人が身体である。地元のスタッフは、最初はボランティアや職人としてかわっているうちに、指導員や世

「なんぐん市場」では、31人の障害のある従業員と専門職1人、地域のスタッフ8人が主な仕事になっている。「多機能型事業所南生」では、25人の利用者と同職1人、地元のスタッフ5人が「なんぐん市場」と連携している。このうち、グループホーム利用者は14人だ。障害種別は、

## これからの愛南町の取組み

保健福祉士、当日は出張で欠席)、越智悠介さん(33歳、精神保健福祉士)、田上純一さん(32歳、作業療法士)の4人、計9人の主要メンバーで打合せを行い、すべての作業の進捗状況を確認し合う。アボカド以外の事業はほぼ担当者が把握している。報告だけで済むようになり、いま最も議論を重ねるのがアボカドの栽培に関することである。それぞれの圃場の担当者、生育状況を伝え、そこにかかわる従業員の配置についても意見交換がなされる。その議論は1時間以上におよんだ。

話人になった。そして、数では見えない、患者でもある、地主の先生たち。漁業にたずさわる人々。大学の先生。商工行政の方々、たくさんの方々が、かかわり合っている。

こうした活動のそもそものきっかけは、宮城県「株式会社 県南衛生工業」ハザカプラントの「循環の良い関係を作る」という理念との出会いからだ。リサイクル活動の主だったメンバーと視察に行き、漁業者、農業者、医療従事者、福祉従事者、商工業者、それぞれの立場のメンバーがこの理念に共鳴できたことが、この多様な地域づくり構想の原動力となったという。漁業を守るには、山の整備が必要であり、竹林の整備のために竹炭の炭焼き小屋をつくったり、みかん畑を整備し直したりと、次々とリサイクル活動から自然環境と循環できるエコ活動に広がってきたという。

アボカドを選んだのも、将来担い手がいなくなり、耕作放棄する事態となっても、竹やミカンと異なり、植えた後、放置しても葉っぱが養分となって土を肥やし再生力のある森をつくる木だからだそうである。

「大切なのは、成功ストーリーではない。地域を見渡し、日々実践の積み重ねが成長につながる」。言葉を噛みしめるように、これからのこの地域の取組みについて、長野先生はスライドにまとめてくださった。

●地に足ついた愛南町の一次産業をベースとした「生業」を守り・創り続ける。

●そこは多様なひとが、多様な価値観を

認め合い、多様な生き方を選択できる地域への一歩。

●あらゆるひとが、なくてはならぬひと。小さな担い手へ。

●「共に生きる」から次のステージへ

最後に、長野先生は話を締めくくってくださった。

「財政規模や人口が少ない地域では、大規模農業は似合わない。小さな小さな家庭農業、家族内農業や小農で日銭を稼げることが地域の活性の大きな要素である。そこを活かすためには、小さな福祉事業所と手をつなぎあい、地域に暮らすすべての人が『働く』ことで、小さな成果が生まれる。その小さなことがとても大きなこと」と。

今回の取材で、徳島県上勝町の横石知二さん(※4)や大分県大山町の矢幡治美さん(※5)など、幾人かのリーダーが中心となって地域の特性を活かした取組みとオーバラップして見えてきた。

未来を見据えた、夢のある暮らしを得る地域づくりは、それぞれの地域の特性を活かして、その生活のなかで循環する仕組みづくりであり、かわる人それぞれの特性を場面面で活かしながら、活躍の場を広げ、そのなかには障害者が「人財」として大きな担い手になっているのだと確信できた。

全国の中山間地域で抱える課題解決のモデル事業が、ここそこにあると感じた。

※4：株式会社いりどりの社長。徳島県上勝町に本社を置くベンチャー企業。料理のつまとして使われる葉類を扱う。上勝町内に在住する葉っぱの生産者に対し、つまの需要情報を提供するほか、葉っぱの営業支援を行う(株式会社いりどりが直接販売しているわけではない)。葉っぱの年間の売上は2億6000万円に達する。

※5：大分県大山町の農協組合長。「田んぼに梅畑に栗を植えよう」、「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズの「うめぐり運動」を展開し、大山町復興のきっかけをつくった。